

# 《臺北人》の主題一考察

## 一人々の「執着」—

久下 景子

### 1. はじめに

《臺北人》は14篇の短篇からなる小説集である。作者白先勇(1937.7.11-)は北伐將軍・国防部長に従事していた白崇禧の第7子で、台湾大学外文系に在学中、級友歐陽子、王文興等と雑誌《現代文學》<sup>(1)</sup>の創刊にも尽力し、60年代台湾モダニズム文学の旗手とみられている。《臺北人》は白先勇が主に雑誌《現代文學》に掲載していた短篇小説をまとめたもので、各作品には国民党軍の大陸撤退と共に台湾に渡ってきた年齢も職業も生活スタイルも異にする人物の生きざまが描かれ、その作中人物の数奇な運命を通し、過去の思い出と現実の狭間に生きる登場人物の姿が作者の冷静な眼をもって描写されている。

この小論は、《臺北人》の先行研究、プロットに言及しながら、作中の登場人物の描写に焦点をあて、《臺北人》の主題の解明を試みるものである。

### 2. 《臺北人》創作背景及び構成

《臺北人》各短篇の執筆は1965年から1971年で、白先勇が28歳から34歳の時である。彼は1962年、アメリカアイオワ大学「作家工作室」に留学し、その後引き続きアメリカに滞在しているので、各篇は在米での作品ということになる。

《現代文學》記載の際には「臺北人之一」「臺北人之二」…というような表題が書かれ、そのシリーズを明確にしている。また、その題目の傍には劉禹錫の〈烏衣巷〉の詩「朱雀橋邊野草花、烏衣巷口夕陽斜、舊時王謝堂前燕、飛入尋常百姓家」が添えられている。白先勇は中唐の詩人劉禹錫が唐朝の国勢の衰えを憂い、歴史の移り変わりの物悲しさを詠んだように、このシリーズ執筆の際に西晋の金陵遷都への歴史を借りて、国民党政

府の來台を表したと言っている。(《樹猶如此》p.201)<sup>(2)</sup>この西晋と国民党政府の関係については、《臺北人》の書名について「登場人物がほとんど台北という都市のネイティブでないのに、どうして『台北人』となっているのか」という山口守氏のインタビューの返答にも繰り返し述べられている。<sup>(3)</sup>1971年《臺北人》として刊行した際には、その第一頁目に「紀念先父母以及他們那個憂患重重的時代」(父母及び彼等のその憂患の絶えない時代を記念して)という言葉を更新たに加えている。《臺北人》各作品の初出は〔表1〕の通りである。〈秋思〉だけ初出が《中國時報》においてである。

〔表1〕: 臺北人作品一覧

(1) 永遠的尹雪艷	(1965・4)-24	(8) 思舊賦	(1969・3)-37
(2) 一把青	(1966・8)-29	(9) 滿天裡亮晶晶的星星	(1969・7)-38
(3) 遊園驚夢	(1966・12)-30	(10) 孤戀花	(1970・3)-40
(4) 歲除	(1967・8)-32	(11) 冬夜	(1970・10)-41
(5) 梁父吟	(1968・5)-33	(12) 花橋榮記	(1970・12)-42
(6) 金大班的最後一夜	(1968・5)-34	(13) 秋思	(1971)中國時報
(7) 那片血一般的杜鵑花	(1969・1)-36	(14) 國葬	(1971・5)-43

(注) ハイフンの後の数字は《現代文學》発刊番号

このようにいくつかの短篇が集まって、一つのテーマを示す手法はJoyce, James (1882-1941) の“Dubliners”の影響を多少とも受けていると指摘される。<sup>(4)</sup>だが、執筆当初から《臺北人》として、14篇を構想していたわけではないようだ。白先勇には「ニューヨーカーシリーズ」<sup>(5)</sup>と呼ばれる一連の渡米中国人知識人の物語があるが、実は《臺北人》の第一篇となる〈永遠的尹雪艷〉はそのシリーズの途中から着手されている。「どうしてニューヨーカーシリーズの執筆をおいて台北人シリーズを書き始めたのか」という林懷民の質問に、彼は「はやく書かなければ、あれらの(《臺北人》作中の: 久下注)人や物語、あのようなゆっくりとなくなりつつある中国人の生活スタイルは、すぐに過去のものとなってしまう、一旦過去のものになると取り返しがつかなくなるからだ」(《驀然回首》 p.

174)<sup>(6)</sup>と答え、更に、「(書くべき題材が:久下注)なくなるまで書く、書けなくなったら終わりだ」(同p.174)と返答している。

白先勇が《臺北人》の各短篇に着手していた正にその頃、大陸では文化大革命が勃発していた。彼の回想にもあるように「当時の創作の心境は国民党政府興亡の歴史の回顧のみならず、それに文化大革命が追い討ちをかけた形となり」(《樹猶如此》p.202)<sup>(7)</sup>、後から回想すると確かに悲観的であったようである。この文化大革命は後の〈夜曲〉(1979)〈骨灰〉(1986)、両作品の主題に取りこまれていく。《臺北人》では歴史的事件としては国民党軍の來台以前の辛亥革命、五四運動、抗日、北伐が取り上げられている。14篇中、史実が明らかものは〈一把青〉の国共内戦、〈那片血一般紅的杜鵑花〉〈秋思〉二作の抗日戦争、〈歲除〉の辛亥革命及び北伐、〈冬夜〉の五四運動、〈國葬〉の北伐である。特に〈冬夜〉という二人の老教授の対話からなる作品について、「今の私は『冬夜』である。」(《樹猶如此》p.203)と述べ、当時《臺北人》の登場人物に比べて年齢が若かった白先勇にとって、「その当時に今の自分の心境を書いたのであって、それは『予言』のようなものであった」(同p.203)<sup>(8)</sup>という。

### 3.《臺北人》登場人物

次に各作品の主要登場人物及び遍歴を〔表2〕にあげる。表2の提出順序は《臺北人》の提出順序に則っている。前掲の〔表1〕と較べると、いくつかの作品において提出順序の異同がみられる。

〔表2〕:《臺北人》主要登場人物及び遍歴

作品名	主要人物	遍歴
(1) 永遠的尹雪艷	尹雪艷	上海百樂門ダンスホールの華(上海) →?高級マンション居住(台北)
(2) 一把青	朱青	金陵女中の学生→空軍飛行士妻(南京) →空軍新生社歌手(台北)
(3) 歲除	賴鳴昇	抗日戦争四川中隊長(大陸) →榮民病院厨房買付け係(台南)

(4) 金大班的最後一夜	金大班(金兆麗)	上海百樂門ダンスホールの華(上海) →「台巴里」ダンスホール「大班」(台北)
(5) 那片血一般的杜鵑花	王雄	農家の息子→抗日壮丁(湖南) →台湾人宅使用人(台北)
(6) 思舊賦	順恩嫂	李家使用人(南京)→療養(台南)
	羅伯娘	李家使用人(南京)→李家使用人(台北)
(7) 梁父吟	樸公(樸圓)	辛亥革命・北伐参軍(大陸) →退官(台北)
(8) 孤戀花	總司令(雲芳老六)	萬春樓ホステス(上海) →「五月花酒家」ホステス(台北)
(9) 花橋榮記	盧先生	名家子息(桂林) →小学校教員(台北)
(10) 秋思	萬夫人	?→日本領事館領事の夫人(?台北)
	華夫人	將軍夫人(南京)→未亡人(?台北)
(11) 滿天裡亮晶晶的星星	教主(朱倅)	上海明星公司の無声映画スター(上海) →?台北新公園の浮浪者(台北)
(12) 遊園驚夢	錢夫人	芸人→將軍夫人(南京)→未亡人(南台湾)
	寶夫人	芸人→次官夫人(南京)→長官夫人(台北)
(13) 冬夜	余嶽磊	五四運動参加(北京)→大学教授(台北)
	吳住國	五四運動参加(北京)→著名教授(米国)
(14) 國葬	秦義方	李將軍庶務将官(大陸) →療養(台南)

(注)「?」は物語において明確に言及されていないもの

袁良駿氏は《白先勇論》において、白先勇の作品群を、登場する主人公やその生い立ち等によって「挽歌」と「哀歌」に分類している。〔表2〕の作品番号を用いるとそれぞれ次のように分けられる。

没落貴族的挽歌(没落貴族の挽歌)…(1)(3)(6)(7)(10)(12)(14)

無辜者の哀歌(罪無き者の哀歌)…(2)(5)(9)

淪落者の哀歌(没落者の哀歌)…(4)(8)

同姓戀愛者の哀歌(同性愛者の哀歌)…(11)

老一代知識分子的哀歌(一世代前の知識人の哀歌)…(13)

この分類によると、《臺北人》の作品半数は「没落貴族の挽歌」に分類される。白先勇自身は《臺北人》において、さまざまな人々を描いたと主張しているが、そこには少なからず偏りがあったことがわかる。これらの登場人物が過分に過去のノスタルジアに取りつかれて現実が直視できない現象をとらえて、「殯儀館的化粧師」(葬儀場の化粧師)というような辛辣な言(李黎「東風」雑誌、出版年月不詳)もあるが、袁良駿氏はこのような発言は非科学的で、文学の独立した美学を見失った評であると反論し、むしろ、白先勇の小説はすでに破壊された美をこの世に再現することであり、白先勇を「逝去的美的造像師」(失った美の創造者)と呼び、それは、魯迅の「悲劇將人生的有價值的東西毀滅給人看」(悲劇は人生の価値あるものを破壊して人にみせる)(《魯迅全集一卷》p.192)に通じるものであるとしている。また、この「失った美」「破壊」と類似の見解として、山口守氏も《臺北人》に流れるリズムを「喪失の甘美な美学」(『講座台湾文学』p.207)と呼び、白先勇の作品は時間も空間もあらかじめ失われていることが前提だとし、表面化しない異郷という意識が持つ郷土への帰属意識と失われた時間という意識がもつ過去への帰属意識の相互関係を指摘している。

また、歐陽子氏は<白先勇的小説世界—「臺北人」之主題探討>一文において、《臺北人》ではその良き過去の中に希望を持つ人々が現実とのギャップから絶望を感じ、破滅していく悲しさを描いていると指摘している。白先勇自身も氏の指摘に賛同し、今までに書いてきたのは「過去と現在」に過ぎないとしている。<sup>(9)</sup>

以下に、主な登場人物が女性であるか、男性であるかで分け、各物語の内容についてみてゆく。紙面の都合により一部作品を割愛している。尚、各作品の引用頁数は1983年度版《臺北人》に拠っている。

#### 4.《台北人》の女性たち

##### (1)<永遠的尹雪艷>

シリーズの第1作である<永遠的尹雪艷>では上海から台北に移ってきた「社交華」(社交界の華)である主人公尹雪艷と彼女に関わる人々の生

きざまが描かれている。物語の冒頭は「尹雪艷總也不老」(尹雪艷はずっと年をとらない)で始められる。十数年前に上海の百楽門ダンスホールで彼女に夢中になっていた男性たちは今では「有些頭上開了頂,有些兩鬢添了霜」(p.1)(在る者は頭が薄くなり、在る者は鬢に白いものがまじっている)のに、他人がどのように変わっても、尹雪艷は永遠に尹雪艷であり、始終不思議な魅力を持った謎の女性として描かれている。ただ、彼女に関わる男性は、「輕者家敗,重者人亡」(p.3)(《被害が:久下注》軽い者は破産し、重い者は命を失って)しまう。台北の彼女の邸宅に集まって日がな一日マージャンに興じる人々は、中国式の部屋の装飾や家具、出される食事に満足し、彼女の一言で「心理上恢復了不少的優越感」(p.9)(少なからず優越感をとりもどす)ことができる。そして、「好像尹雪艷便是上海百樂門時代永恆的象徵,京滬繁華的佐證一般」(p.6)(尹雪艷はまさに上海百樂門時代の永遠の象徴で、北京、上海の繁栄の証のよう)であった。物語では大陸時代からの常客呉經理の甥である青年実業家徐壯図が彼女と知合い、円満な徐の家庭に風が吹き、最後に徐が自社の作業員に錐で胸を突き刺されて亡くなるという事件が起こる。尹雪艷は大胆にもその徐の葬儀に参列し、その遺児の頭を撫で、彼女の参列に呆然としている徐の妻と握手をするが、徐壯図の死を悼んでいるのかと思うと、葬儀の夜に自宅でマージャンの会を催すという不可解な行動をとる。そして、甥の葬儀を取りしきった呉經理が日頃は負けてばかりのマージャンで大勝利に歓喜するという場面で物語は終わる。尹雪艷の邸宅では人々の時間は止まり、マージャンに興じるさまは、「狂熱的互相廝殺,互相宰割」(p.12)(熱狂的に互いに殺し合い、侵略しあって)、それは弱肉強食の現実社会に生きる人々の世界を揶揄しているようでもある。白先勇は《臺北人》において、この作品と他の作品とは「調子」が異なるとし、その異なる「調子」は「諷刺」であると述べている。<sup>(10)</sup>尹雪艷の冷ややかな目を通して、過去に時間が止まった来台の人々を浮き彫りにした作品と言えるだろう。

## (2) <金大班的最後一夜>

元上海百楽門ダンスホールで働いていた金兆麗が台北の繁華街西門町にある「夜巴里ダンスホール」を去る最後の一夜の物語が<金大班的最後一夜>である。金兆麗は上海百楽門で名をあげたダンサーだったが、台北

に移ってからは、そのメインホールが百楽門ダンスホールの化粧室よりも狭いと馬鹿にする「夜巴里」で「大班」(ダンスホールのチーフ格)として働いていた。そして、「夜巴里」も今宵が最後の夜である。

白先勇はこの作品の創作動機について、実は彼自身は1回しかダンスホールに行ったことはなかったが、その時にちょうど出会った「大班」の昔話に興味を持ってこの物語を書いたと回想している。<sup>(11)</sup>若い頃は高望みをしていた金大班も、「四十歳の女人不能等。四十歳の女人没有功夫談戀愛」(p.78)(四十の女は待てない。四十の女は恋愛する暇なんかない)と彼女を慕っている貧しい年下の水夫ではなく、「四十歳の女人,還由得你理論別人的年紀嗎?」(p.75)(四十の女に他人の年齢をとやかく言うことが許されるのか)と考え、金持ちの陳老頭と結婚し将来を功利的に生きようとする。美容院で顔をマッサージしたり眉を整えたり、「臉上就沒剩下一塊肉沒受過罪」(p.75)(顔にはひどい目に遭ったことのない部分はない)ほどで、陳老人と出かける時はいつも「竟像是披枷戴鎖,上法場似的,勒肚子束腰,假屁股假奶」(p.75)(枷をつけ鎖をかけられ、処刑場に出頭するようだった。お腹をしめて腰を引き締めて、偽のヒップに偽の胸)(p.75)で、年齢も三十五歳だと騙していた。目をかけていたダンサーの朱鳳が香港からの留学生と恋仲になり、子供を宿したことに、初めは朱鳳を軽率な女だと口汚く罵り、墮胎を勧めるが、若い頃の同じような自分の過ちを思い出し、「難道賣腰的就不是人嗎? 那顆心一樣也是肉做的呢」(p.83)(ダンサーは人じゃないっていいのか? その心も同じように肉で作られているんじゃないか)と考える。最後には500ドルもする指輪を朱鳳に渡し、子供を生んで育てるように言う。上海、台北と水商売の世界に生きてきた金大班がその因果な仕事の最後の夜に朱鳳の不始末を知ることによって、遙か昔の切ない思い出を甦らせ、彼女を無償で助けることにより、純粋な気持ちを取り戻す。人生を紆余曲折しながら歩いてきた金大班の一本気な生き方が記されている。

### (3)〈遊園驚夢〉

〈遊園驚夢〉は元女演歌師だった藍田玉が以前の同業者で寶瑞生夫人となった台北の桂枝香宅を訪れるパーティの一夜の物語である。南京の「得月台」で藍田玉の「遊園驚夢」を聞いた錢鵬志將軍はその声が忘れられ

ず、老齡ながらも孫のような彼女と結婚し、第一夫人の地位を与える。この「得月台」は民国時代、南京に実存した場所で、白先勇のエッセイに「民国時代の南京でも一世を風靡した『清唱』の場所で、当時『平劇』や『昆曲』を歌っていた娘は出世して、あるものは大スターになり、あるものは官僚の奥さんになった」(《樹猶如此》p.69)<sup>(12)</sup>と書かれている。そこから、作品中の藍田玉のような境遇は当時必ずしも珍しいものではなかったと考えられる。また、この作品の初出は「台北人シリーズ」の第三作目であるが、「たぶん南京に対する特別な感情から、早くに《遊園驚夢》を書きおき、それは古都への尽きぬ思いと言える」(同p.70)<sup>(13)</sup>と回想されているので、この物語の構想は早くにあったと思われる。

藍田玉は將軍の死後は錢夫人として台湾の南部でひっそりと暮らしていた。物語の始めには南京から持って逃げた「這些年都沒捨得穿」(p.208)(ここ何年か惜しくて着ていなかった)杭州シルクで新調したチャイナドレスの色が「有點不對勁兒」(p.207)なことや、デザインが古いことに気をもんだり、社交界から離れていた錢夫人の微妙な心境が描かれている。方や、錢夫人が榮華を極めていた頃、南京で三十歳の誕生日を祝ってやった桂枝香は夫の官職も上がり、第一夫人の地位も獲得して、その威勢は今や逆転していた。「果然還沒有老」(p.208)(案の定、まだ老けてはいなかった)とあるように、その榮華を称えるように肉体的な若さも保たれていた。酒宴の席では、今まで「錢鵬志の夫人當然上座、她從來也不必推讓」(p.220)(錢鵬志の夫人はもちろん上座で、夫人も今まで辞退する必要はなかった)のが、在席者と席を譲り合った後に顔を赤らめドキドキしながら上座につくことになる。

この錢夫人には將軍に隠れて若い參謀と過ちを犯したことが一度だけあった。物語の中では「榮華富貴、可是我只活過那麼一次」(p.234)(榮耀榮華一だけど私はその一度だけしか生きてはいなかった)の言葉が二度繰り返される。この酒宴の席でも、嘗ての參謀を思い出させるような程參謀が錢夫人の前に現れる。パーティ会場での「遊園驚夢」の生演奏をBGMに、実の妹とともに去っていた參謀、亡くなる前の將軍の言葉というように錢夫人の過去が彷彿されていく。既に過去のものとなった夫人の輝かしい日々、そして妹に裏切られ、心の奥に葬っていた苦い過去が一



夜の饗宴の席上で一度に夫人の胸中に甦る。

この作品は「白先勇が偏愛している」と言われ<sup>(14)</sup>、白先勇自身も《臺北人》の中で書くのが一番大変だった作品にあげている。<sup>(15)</sup>また、主人公銭夫人の身上の悲劇には、伝統文化芸術の衰退への哀悼がただよっているという見方もある。<sup>(16)</sup>

## 5.《臺北人》の男性たち

### (1)〈冬夜〉

〈冬夜〉は先にあげたように、白先勇が自己を予言した作品だと述べた物語である。老齡の余嶽磊教授と呉柱国教授を主人公とし、台湾の余の家を在米の呉が訪れ、二人の会話を通して学生時代を回想する物語である。北京で共に五四運動に参加したことのある余と呉は、現在、前者は台湾で西洋のバイリンを教え、後者はアメリカで中国史を教授している。そして、在台の余は家庭の経済的事情から奨学金を得て渡米することを望み、反対に在米の呉は退職後台湾に戻ることを欲している。二人の会話から、当時の同志たちが、ある者は共産党の反右派汚名の屈辱から飛び降り自殺をはかって亡くなり、ある者は約束を破って台湾の官僚となり、ある者は困窮した家庭を支えるために過度の補習授業で体を壊していることがわかる。この体を壊していた元同志賈宜生は余と同じ大学に勤務していたが、夜間の補習授業に出かけた際に、暗渠にはまってあっけなく亡くなる。

この物語の最後に余の次男俊彦が戸外から戻ってくる。呉は余の北京時代を思い起こさせる容貌をした俊彦に吃驚する。兄と同じように米国に留学を望んでいる彼は父の小父さんに質問してもいいという言葉に即座に、「加大物理系容易申請奨学金嗎」(p.259)、「我聽說加大物理系一個實驗常常要花上幾十萬美金呢」(p.259)と奨学金のことや物理学部が如何に実験に費用を費やしているかなどについて話す。この頃の台湾の風潮として、男子にとっては人文学よりも物理学、工学方面に進むほうが将来有望であると思われていたことが俊彦の言葉を借りて物語にも反映されている。白先勇自身も始めは台湾南部の成功大学水利系に進学していたのが、理工系に馴染めず、文学へ転向するという経歴をもっていた。

その転向の折に、父白崇禧は「行有餘力,則以學文」と『論語』の言葉を以て訓戒を述べた(《驀然回首》p.71)とあるので、白先勇の父も彼が文学を志すことに必ずしも賛成ではなかったことがうかがえる。

二人の老教授のうち、特に在米の呉教授の言葉には異国に身を置く知識人の苦悩が強く表れている。彼は自分を「逃兵」(p.253)「唐玄宗の白髮宮女」(p.253)と揶揄し、数々の著作も全ては職を維持するためであると告白する。青年時代に輝かしい活躍をしながら、老齡期を迎えた二人の知識人の不安な未来が冬の雨が冷たく降りしきる台北の夜に暗示されているようである。

## (2)＜那片血一般紅的杜鵑花＞

＜那片血一般紅的杜鵑花＞は主人公王雄が退役し、台北のある未亡人宅に下男として働き、新しい生活を始めようとする物語である。湖南の田舎で農業に従事していた王雄は18歳の時に町の市に物売りに出かけようと村を出た途端「壮丁」として捉まり、そのまま入隊、軍とともに來台していた。このような強制的な「壮丁」は主に農家の男性に禍が降りかかることが多かったようで、彼らは來台後も「反攻大陸」を信じて、大陸に残して来たガールフレンドや許婚への思い、或は経済的な困難から容易に台湾で結婚できなかったという。<sup>(17)</sup>

王雄の境遇は正に前者である。彼が下男として働く未亡人宅には湖南の田舎に彼が残してきた「童養媳」(年少の許婚)と同年の可愛い娘「麗兒」がいた。夫人に「難得他們兩個人有緣!」(p.96)(二人は縁があるのだね!)と言わせたように、40歳の王雄と小学生の娘は頗る仲がよく、王雄は娘が好む杜鵑花を庭に百株余りも植え、不器用な手つきで丹念に育てていた。しかしながら、中学校にあがった麗兒は習いたての英語で王雄を指差し大きな声で「You are a dog.」(p.102)とからかい始める。麗兒は三輪車で送り迎えをしていた王雄を友人から「ゴリラ」と言われて以来、自転車通学に変更し、彼を毛嫌いし始める。彼女の成長とともに、王雄も故郷の「童養媳」がここにはいなかったという現実に向き合わざるをえなくなる。ちょうどその頃、日ごろ避けていた下女喜妹と口げんかをし、彼女の発した「考背!」(p.107)(おいぼれ!)の一言で、その夜、彼女を犯し、海に身を投じる。その投身は「我們湖南鄉下有趕屍的,人死在外頭,要是家

裏有掛得緊的親人,那些死人跑回去跑得才快呢」(p.98)(湖南のうちの田舎じゃ、死体が走って帰ってくる。よそで死んでも、とても気にかけている身内の者を家に残していると、死人が大急ぎで帰ってくる)という「趕死」を信じ、最後に行き場を失った王雄が故郷に思いを馳せた結末であった。だが、彼の遺体は「被潮水冲到了岩石縫中,夾在那裏,始終沒有漂走」(p.91)(潮に打たれて岩の間にはさまって、ずっと流されない)で、頭や顔は魚に啄ばまれ、既に腐敗していた遺体は周囲に悪臭を放っていた。また、物語の最後で未亡人が「天天夜裏,我都聽見有人在園子裏澆水的聲音」(p.108)(夜な夜な誰かが庭で水をやっている音が聞こえる)と語っているが、王雄の死後から誰も手入れをしていないはずのつつじの花が翌年の春にも見事に咲き誇る。このつつじは《説文》に古蜀王、望帝の故事があり、行き場を失った王雄の魂が庭園に戻ってきたことを暗示させる。

### (3)＜歳除＞

＜歳除＞は引退老兵頼鳴升が台北の軍眷宿舎に住んでいる元部下の劉営長の家で年越しをする一話である。物語の描写は寒波に襲われた台北の大晦日の様子から始まり、カメラがズームされるように暖かな蠟燭の炎が燃えている劉の家の中の情景へと移行していく。部屋で年越しの食事を楽しんでいるのは頼鳴升、劉夫婦、10歳になる劉の子供・劉英、そして夫人の従妹にあたる驪珠とそのボーイフレンド愈欣の6人である。頼は自分のことを「現在不過是榮民医院厨房裏的買辦。這種人軍隊裏叫什麼?伙伕頭!」(p.56)(今は榮民病院の厨房の買い付け役にすぎない。こんな奴を軍隊では何て呼ぶか?炊事夫だ!)と卑下して大笑いするが、幼い劉英が同じように笑うと、その頭を叩いて、「你笑什麼,小子?你莫錯看了伙伕頭…」(p.56)(チビ、何を笑ってんだ!思い違いするなよ、炊事夫は…)とお説教を始める。再婚を勧める劉の妻の言葉に、三万余りの退役金をつぎ込んで娶った山地の寡婦が「過門三天,逃得鬼影子不見半個」(p.60)(やってきて三日で、跡形もなく姿をくらました)ことを白状し、「要是我還能像他一樣,」(p.61)(もし俺が彼と同じだったら)と若い愈欣を羨む。しかし、すぐさま、自分の若かりし頃を思い出し、「比你還要威風幾分」(p.61)(おまえよりもずっと威勢がよかったんだ)と気を取り直し、上官

の夫人から誘惑を受けたことや「台兒莊」での壮絶な戦いぶりなどを自慢そうに話す。そして、凜々しい俞欣の唯一の欠点である「酒が飲めないこと」を嘲り、「酒豪」を自負しながらも、最後には酒に酔っ払って年越しを待てずに寝てしまう。

この作品では、來台した多くの下級兵士が実際に直面したであろう求職、結婚、老後などの問題が具体的に語られている。同時に、彼らにとって過去の従軍、参軍の体験が偉大な誇りであり、日常生活の心の支えになっていたこともわかる。そして、隣の兵営のラッパが鳴るとすぐに起きだし、昔、軍隊でやった訓練を一人であれこれと繰り返す頼の姿、「日後打回四川,你大哥別的不行了,十個八個飯鍋頭總還擡得動的」(P.69)(四川に巻き返しをする時にゃ、8つや10の鍋釜はまだかついで行けるさ)という豪語には未だ「大陸奪回」を夢見る一兵士がくっきりと浮かび上がる。

#### (4)〈国葬〉

〈国葬〉は「台北人シリーズ」最後の作品である。年老いた秦義方が元上官李浩然の国葬に参列する物語で、その葬儀の始めから終わりまでが秦義方の目を通して語られる。杖をついてヨロヨロと祭壇に向かう秦義方は嘗て長官の下で「三將」と呼ばれた人々の変わり果てた姿を眼にする。特に、大陸で捕虜となった劉行奇は袈裟を着た僧侶の姿で斎場に現れる。また、幼いときに軍服を着せ、靴を履かせた「少爺」は斎場では彼に知らん顔である。この息子はともあろうか軍人学校を仮病で退学し、アメリカに出国していた。それ故、親子の関係は断絶し、秦義方が体の養生の為に南部に暇を出されて以来、年老いた勝気な長官の世話をするものはいなくなっていた。盛大な国葬とは比べるべくもなく、長官は一言の言葉も残すことなく、深夜床に倒れてそのまま亡くなっていた。秦義方は棺をのせた霊柩車を送るために、大胆にも護衛車に乗り込もうとする。それを阻止され、「我是李將軍的老副官」(p.276)(俺は李將軍の副官だ)と言い、毅然とした態度で再度トラックに乗り込もうとする。この「副官」という言葉は、秦が斎場に現れ、記帳する際に真っ先に口にした言葉である。彼は人に「李浩然將軍の副官」と言われるたびに、この上ない光栄を感じていた。「副官」には秦と長官との繋がりのみならず、その

役職に対する彼の強い自尊心と拘りがうかがえる。

靈柩車が通り、道端の兵士が「敬礼」の号令で目礼をするのを見て、秦義方は抗日勝利後の南京中山陵参拝を思い出す。それは「他從來沒見過有那麼多高級將領聚在一塊兒」(p.277)と回想するように莊嚴なものであった。この中山陵参拝は抗日勝利後、白先勇も父に連れられて実際に経験したことであった。<sup>(18)</sup>その時の思いを「副官」によって語らせたと言える。

## 6. まとめ

以上、限られた作品ではあるが、《臺北人》の各物語についてみてきた。その年齢、生活背景等も異なり、主題を特定化することは容易ではない。しかしながら、物語のそれぞれの主要登場人物に何らかの「執着」が見られることは確かである。ここでは4,5で言及することのできなかった作品にも多少ふれながら、その「執着」について考えてみたい。

まず、「執着」の顕著な人々として、嘗て従軍経験のある老兵士たちがあげられる。頼鳴升(<歳除>)、秦義方(<国葬>)両者には過去の武勇への誇りが見られる。それは年齢を重ねた彼らの不器用な言動において、時に感じられる覇気でも表されている。特に頼鳴升のような下級兵士にとって、過去の武勇の栄光は現実生活を生きてゆく上でも大切なものではなかっただろうか。

前節では取り上げなかった<梁父吟>の主人公樸公にも頼鳴升や秦義方に共通する過去の参戦へのこだわりが見られる。<梁父吟>は大陸で辛亥革命、北伐の同志であった孟養の葬儀から戻った樸公がその部下と自宅で将棋をしながら、昔を回顧してゆく物語である。樸公も頼鳴升と同じように「大陸奪回」を信じ、孟養の部下に「大陸を取り戻したら、主人の棺をどんなことがあっても故郷に運ばなければならない。其の時のために、主人の軍服や勲章をきちんと保管しておくように」(P.140)と命ずる。樸公の二人の息子たちは渡米し、館にいるのは彼に仕える年老いた侍者と小学3年生の孫の效先だけである。その孫は「他剛回來的時候,一句中國話也不會說,簡直成了個小洋人」(p.136)(戻ってきたばかりの頃は、一言も中国語がしゃべれなくて、まるで小さなガイジンだった)のが、老

人とともに勉強することで中国語もでき、唐詩さえも暗誦できるようになっていた。このように樸公が孫に中国語や唐詩を伝授し、自国の歴史や文化を継承させようとする姿にも老人のこだわりや一徹さが感じられる。《臺北人》執筆時には「過去のお題目」となっていた「大陸奪回」を頼鳴升や樸公という老人に語らせることによって、彼らの大陸への「執着」を顕著にさせるのみならず、そこに、作者白先勇自身の大陸への認識も示されているように思われる。

次に、過去に参戦経験のある男性につかえ、その栄華、栄光を共に享受した女性たちの「執着」が考えられる。〈遊園驚夢〉では錢夫人は元々演歌歌手にすぎなかったが、将軍と結婚することにより、想像もしていなかったような栄華を得る。既述の通り、そのような女性の遍歴は当時において珍しいことではなかったようであるが、夫によってもたらされたものは、夫の死と共にその輝きも失われてゆく。無情な運命とは知りつつも、嘗ての将軍夫人として得た誇りはそう簡単に消えるものではない。〈遊園驚夢〉作中で、錢夫人が身なりに気をつかったり、酒宴の席にこだわったりするのも過去の誇りと無関係ではないだろう。同様に元将軍夫人を描いた物語に〈秋思〉がある。〈秋思〉は未亡人の華夫人が萬夫人宅でのマージャンの誘いに赴く際に、庭に見事に咲いた菊の花の間に腐蝕した花を見つけたのを機に、夫人が夫の最期を想起する短い物語である。〈遊園驚夢〉の錢夫人に対して寶夫人が存在していたように、未亡人である華夫人の前には駐日大使を夫に持ち、正に勢いづいている萬夫人が登場する。マージャンの誘いに出かけるのでさえも美容師を家に呼び、身支度をととのえて出かけようとする華夫人の姿に嘗ての将軍夫人としての見栄、プライドとも言える複雑な心理が読み取れる。

男性を主人公とした作品においては、王雄(〈那片血一般紅的杜鵑花〉)のように、異性への「執着」が主題となったものもある。故郷の「童養媳」に気持ちを馳せることによって、台湾での王雄は救われていた。ただ、その強い思いによって、退役して新しい生活を始めようとした彼の時計が止められてしまったことは事実である。正確には「止める」というよりも「戻す」と言ったほうがいいかもしれない。働き先で「童養媳」に似た麗児に出会い、王雄の思いは故郷の湖南に飛んでいったのである。

出身は異なるが、小学校教員をしていた＜花橋榮紀＞の盧先生にも、同じように異性に対する「執着」が見られる。彼は大陸に残してきた「未婚妻」を台湾に呼び寄せるために結婚の話も断り、コツコツと貯蓄していた。その貯蓄を全て騙し取られ、抱いている思いが叶えられないとわかった時、真面目な盧先生が呆気なく性の誘惑に負けてしまう。彼は若く「肉弾弾の一身」(p.176)(肉の弾けた)、「見了男人,又歪嘴,又斜眼」(p.176)(男性を見ると口をゆがめて、流し目をする)市場の洗濯女阿春の虜となり、白髪頭を真っ黒に染め、顔に白粉を塗って阿春の後につきそう。この王雄、盧先生の例は異性への純粋な思いが、一旦挫折を経験することにより、人を自暴自棄に陥らせるという異性への「執着」の悲しい結末を物語っているようである。

以上、過去の武勇、栄華、栄光、異性への「執着」についてふれてきたが、水商売の女性を描いた何作かにおいては、何かに「執着」する度合いが低いように思われる。山口守氏はそれをヒエラルキーからの逸脱の故だととらえている。(『講座台湾文学』p.204)確かに、社会の底辺で暮らす彼女たちにとって、もはや「執着」するものはないのかもしれない。むしろ、それら「執着」の軽い人々を物語に登場させることによって、対極にある人々を冷ややかに浮き上がらせるという対比の効果が意図されていたのかもしれない。その代表的なものは第1作の＜永遠的尹雪艷＞だろう。尹雪艷の周りに集まる人々は彼女を過去の繁栄の象徴と崇め、彼女の家に行ってマージャンに興じたり、彼女と話をしたりすることにより、慰めを得ている。反対に、時間によって変わることのない尹雪艷は過去の時間の柵から抜け出ることのできない人々を冷ややかな眼で見ている。その冷ややかな眼は時には作者白先勇の眼とも重なっていたとは言えないだろうか。

興味深いことに、＜永遠的尹雪艷＞の次作＜一把青＞では主人公の女性朱青は尹雪艷とは対照的に、南京、台北と場所が変わることによって、その職業も性格も豹変している。南京では女学生で恥かしがりやであった彼女が台北では娯楽施設の歌手として舞台に立ち「笑吟吟地没有半點兒羞態」(p.38)(ニコニコ笑いながら少しも臆す様子がない)。飾り気のなかったさまは「衣著分外妖嬈」(p.38)(殊のほか艶かしい服装)となってい

た。朱青は夫の墜落死という南京での強烈な出来事によって愛するものの、即ち彼女の「執着」を失ったが故に、後の人生において環境に容易に適応し、変貌していったのかもしれない。しかし、物語ではその「執着」を捨てたはずの彼女の前に、夫と同じ職種の飛行士である小顧が現れ、夫と同じように小顧も墜落事故で亡くなる。それは恰も作者が仕組んだ新たな試練のようである。このように大陸と台北二地点を舞台として、過去と現在における遭遇の繰り返しを物語に取り込んだ作品は既述したく金大班の最後一夜の構成にも見られた。そして、金大班の若かりし頃の過ち(大陸・過去)と朱鳳の遭遇(台北・現在)は各々場所と時間を異にするだけではなく、当該人物も異にしているが、金大班にとっては同一現象の繰り返しともとらえることができるだろう。つまり、環境の変化に適応するために「執着」を捨てた彼女たちの前に、その「執着」を再度思い起こさせるような事件が発生し、彼女たちに新たな試練が与えられていくのである。金大班は理想の男性を求めていたが、自分の年齢を考え、今夜を最後にダンスホールから去ろうとしていた。それは彼女の理想のパートナーへの「執着」を捨てた姿である。しかしながら、その最後の夜に、朱鳳の過ちを耳にすることにより、自分の過去の甘美な出来事を思い起こす。それと同時に彼女は純粋な愛の感情を取り戻し、遥か昔に捨て去っていた純粋な愛への「執着」を回顧する。そして、朱鳳に高価な指輪をやることにより「好きな相手の子供を生む」という自分が過去に果たせなかった夢を朱鳳に託す。

物語中の人々が執着するものは栄華、栄光、武勇、誇り、異性、愛情と多種多様である。また、それらはその強弱も異なり、複数が交錯し複雑なさまをする時もあるだろう。個々の経験を背景として形成されていった感情が、心を占め肥大化する。そして、個々のコントロールを超えて、その心を支配し始める。もし、感情に対する人々の過度の「執着」がなければ、得体の知れないブラックホールは形成されないはずである。心が執拗な感情に占拠されると、人々は過去の経験から生まれた感情の中に引き留められ、「現在進行形」の現実を直視する機会を少なからず失ってしまう。《臺北人》には過去の感情にとらわれた人々の人生の苦悩がうかがえる。そして、その解き放たれない過去の感情の渦中におかれた人々は、あ



る者はそこから抜け出ようとするが、逆に、その渦に呑み込まれてしまう。そこには人々の「執着」が大いに関係しているだろう。

## 7. おわりに

張大春の自伝的作品に眷村に住む子供たちが地球の向こう側のアメリカに辿り着くために力を合わせて穴を掘るという散文がある。(〈遼寧116巷〉《中國時報・人間副刊》1991.9.13) 無邪気な子供たちは今日一日でアメリカに辿り着けなかったので、明日はもっと早くから穴を掘ろうと約束をする。この小品からも「反共」という言葉が空洞化した後、当時の若者が心に描いていたのはもはや「帰る」大陸ではなく、「行く」新天地であったことがうかがえる。白先勇はその新天地で、自らを大陸にも台湾にも戻さず、過去と現在の時間の狭間にあって、大陸と台湾で生きる人々を描いていたことになる。

《臺北人》最後の作品〈国葬〉は「敬礼」の号令で物語が終る。そして、この靈柩車を見送る兵士の「敬礼」という言葉に、秦義方は南京時代を思い出し、彼の回想の中で、「敬礼」は中山陵参拝時の「敬礼」という号令と重なっていく。この言葉は正に現在から過去を偲び、そして未来へも続く、白先勇の作中人物一人一人への畏敬の念の表れであり、労いの言葉と言ってもいいのではないだろうか。

## 〈注〉

- (1) 1960年3月創刊。経済事情により1973年第51期で停刊。1977年7月《現代文學復刊》発行、1984年5月、第22期で停刊。
- (2) 把它當做題詞是有原因的。劉禹錫是中唐人，唐朝的國勢已經衰落了，他嘗過許多滄桑，(中略)借西晉遷都金陵的歷史，比喻國民政府渡海到臺灣。
- (3) インタビューの返答は以下の通りである。

結局私は『台北人』で歴史を書いたのだという気がします。中国の歴史です。『台北人』は国民党政府と共に南京から台北へ逃れてきた人々を描いているわけですが、過去の中国の歴史を見れば、四世紀三国時代に西晋が東晋へと替わる時に洛陽から南方へ都を移したり、また北宋が南宋に移行する時に南方へ遷都したことの再演のようなものです。歴史が繰り返されることのアイ

ロニーです。(「白先勇氏インタビュー」『ユリイカ』2000年8月号)

- (4) 柯慶明〈情慾與流離—論白先勇小說的戲劇張力〉《中外文學》第30卷第2期 P.30
- (5) 〈芝加哥之死〉(1964.1)、〈上摩天樓去〉(1964.3)、〈安樂鄉的一天〉(1964.10)、〈火島之行〉(1965.2)、〈謫仙記〉(1965.7)、〈謫仙怨〉(1969.3)などを指す。
- (6) 「我想『臺北人』對我比較重要一點。我覺得再不快寫,那些人物,那些故事,那種已經慢慢消逝的中國人的生活方式,馬上就要成為過去,一去不復返,」白先勇揮伸著手臂說…「一去不復返了。」
- (7) 既充滿了國民政府興亡歷史,又遇上了文化革命,就這樣一個個故事寫下去,到最後一章才想起了這個基調,可能跟〈烏衣巷〉這首詩有相當關係。
- (8) 《臺北人》里面的人物,大都是中、老年。中、老年大都有很沉重的回憶。我當時很年輕,在那個時候寫我現在的心境,好像預言一樣。尤其是〈冬夜〉那一篇,寫的是一位老教授。現在的我,就是個「冬夜」。
- (9) 我老覺得美的東西不長存,一下子就會消失,人也如是、物與風景也如是。(中略)歐陽子說整部《臺北人》講的都是時間一過去與現在。其實,我從開始寫作起以至現在,也許就只講了那麼一點。《第六隻手指》p.448
- (10) 不過,第一篇的調子跟其他幾篇不太一樣,〈永遠的尹雪艷〉寫的是上海一個高級交際花的故事,她是永遠不老的一位美人。這篇有一點諷刺的調子。(中略)世上沒有東西是永遠的,尤其是人,不能永遠。《樹猶如此》p.202
- (11) 其實我只去過一次舞廳,第一次回國時,……我看到一個大班,他們說她以前是上海百樂門的紅舞女,我忍不住就替她編了一個故事。《驀然回首》p.174
- (12) 得月台在秦淮河畔,是民國時代南京紅極一時的清唱場所,當年那些唱平劇、唱昆曲的姑娘,有的飛上枝頭,變成了大明星、官太太。
- (13) 大概是出於對南京一份特殊感情,很早時候便寫下了《遊園驚夢》,算是對故鄉無盡的追思。
- (14) 在眾多作品中,白先勇獨獨偏愛「遊園驚夢」。不是因為外界對這個短篇有超乎尋常的好評。《驀然回首》pp.173-174
- (15) 我寫這篇小說最苦,至少寫了五遍,所以印象深刻。《樹猶如此》p.205
- (16) 他的「遊園驚夢」,誠然寫出了錢夫人的身世悲劇,但其中回蕩著的也有對傳統文化藝術(特別昆曲藝術)由盛而衰的哀惋。《白先勇論》p.30
- (17) 已婚者來台之後三、四十年不得與大陸親屬聯繫;未婚者,尤其是士官兵階級,直到民國五十年以後年滿28歲才可結婚,而到了此時,大多數士官兵都已三、四十歲以上,較正常結婚年齡超出許多。〈臺灣文學中的老兵題材〉p.17

(18) 那年父親率領我們全家到中山陵謁陵,爬上那三百九十多級石階,是一個莊嚴的儀式。多年後,我才體會得到父親當年謁陵,告慰國父在天之靈抗日勝利的心境。《樹猶如此》p.70

【参考文献】

- 白先勇(1971)《台北人》晨鐘出版社
- 白先勇(1976)《寂寞的十七歲》允晨文化出版
- 白先勇(1978)《驀然回首》爾雅出版社
- 白先勇(1983)《台北人》爾雅出版社
- 白先勇(1983)《明星珈琲館》皇冠出版社
- 白先勇(1983)《擊子》允晨文化出版
- 白先勇(1995)《第六隻手指》爾雅出版社
- 白先勇(2002)《樹猶如此》聯合文學出版社
- 歐陽子(1976)《王謝堂前的燕子》爾雅出版社
- 吳湘文(1976)〈評白先勇的「冬夜」〉《中外文學》
- 劉俊(1995)《悲憫情懷》爾雅出版社
- 袁良駿(1990)《白先勇論》爾雅出版社
- 『ユリイカ』2000年8月号(「白先勇氏インタビュー」)
- 台湾大学編(2001)《中外文學》第30卷第2期(白先勇特集)
- 曾秀萍(2003)《孤臣・擊子・台北人》爾雅出版社
- 山口守編(2003)『講座台湾文学』図書刊行会
- 蘇偉貞編(2004)《台灣眷村小說選》二魚文化事業有限公司
- 蔡淑華(1998)〈眷村小說研究—以外省第二代作家為對象〉政治大學碩士論文
- 曾淑惠(2000)〈老兵文学〉華梵大學碩士論文